

檜

眼如赤酸醬略。○註松柏。生於背上而蔓延於八丘八谷之間。

〔新撰字鏡〕木古免反又、又古活反比。

〔倭名類聚抄〕木二十檜。爾雅云、檜柏葉松身音會又入聲、古活反和名非。

〔箋注倭名類聚抄〕說文毛傳、檜柏葉松身、焦循曰、合二家之市曰儉、檜之爲木合松柏二木而得是名、故謂之檜、縱亦取叢聚之義、叢聚猶之會合也。略○中按、字鏡同訓、鑽是木得火、故爲名、廣雅、栝柏也。

栝與檜同、栝可充飛乃岐、故源君訓、檜爲飛然對文、則栝與栝異、下總本、飛下有乃木二字、與伊呂波字類抄合、類聚名義抄兩載。

〔倭訓栞〕前編二十五ひ○中檜を、ひとものきともいふ、火を出す木なりといへり、本草に据ば

檜はいぶきなるべしともいへり、癸辛雜識にいふ、新羅松一名羅木なるものといへど、羅木は日向松なるべし、又唐ひのきあり、山ひのきあり、葉こもれり、

〔幽遠隨筆〕下檜をさき草。といふは、唐土道州といふ所は濁水の地にて、人常に是を飲ゆへ、短命也、

此里には檜を尋ねとりて水に入れば、水澄て短命をのかる、によつて、檜を幸木サキキといふ、民部卿入道の御説なり、幸サチとよむ常の事也、サチサキ通音なり、

〔東雅〕樹竹十六檜ヒ○中李東壁本草に見えし所は、栝葉松身者檜也、其葉尖梗亦謂之栝、今人名圓栝

以別側栝と見え、通雅にも圓栝卽刺栝所謂檜也と見えたり、されど圓栝といふは卽今俗にイブキといふ物にして、側栝といふは亦俗にコノテガシハといふ是也、古より我國にして、ヒノキと

いふものにはあらず、正字通には、今檜葉似、油杉幹如栝、其兼栝葉者名二色檜、爾雅說文皆云、檜栝葉松身、然今檜葉四出、葉半作束、半如栝葉、其木堅實、外白內朱、謂之松身、非是、或松葉栝身、庶幾近似

と見えたり、すべて是等の説の如きも、正しく檜といふもの知れりとは見えす、正字通に二色檜といふものは、卽混栝此にビヤクシンといふものこれなるべし、むかし、我師なりし人の教へて、